

「みつともないじゃないの。ほんとに…。おばあちゃん。いったい何のつもりなのよ」

露は杏子よりもっと大きな息を吐きながら、身体中を波打たせていた。

「おばあちゃん、大丈夫？ 杏子、手荒なことをして…。怪我でもしたらどうするの」

千枝は露に馳け寄った。

袷元を直し、ずれたちゃんちゃんこを整えながら千枝は胸が迫ってくるのをどうすることもできなかった。

いつも祖母に優しい杏子が激情的になったのは驚愕と動転のせいなのだ。

あまりにも哀しい祖母の姿を消したくてハン

露はゆっくりと目を開けた。そして千枝を見た。

それから杏子を見、やおら口を開いた。

「キレイニナリタイ…キレイニナリタイ、キレイニナリタイヨウ…」

低い声で、歌うような調子でくり返すその言葉は、最初、不明瞭でよくわからなかった。だが、何度目かによくやくはつきりと聞きとった時、千枝と杏子は思わず顔を見合わせた。

かつての日、幼い杏子を抱いて子守唄を聞かせた時のように、露は節をつけた言葉をささやくように口ずさんでいたのである。

「キレイニナリタイ…キレイニナリタイ、キレイニナリタイヨウ…」

カチを取り出した杏子の気持ちだが、千枝には手に取るようによくわかっていった。千枝とても同じであった。だが露の行動の内側にあるものがわからない今、千枝には軽卒なことができなかったのである。

露は千枝に着物の乱れを直されながら、目を閉じたままであった。

しかし、よく見ると唇だけがわずかに動いていた。その唇の奥から何かが聞こえていることに千枝はふと気がついた。

耳を寄せてみると、聞きとりかねるほどの声で、しきりに露は呟きをくり返していた。

「え？、なに？ おばあちゃん…」

「おばあちゃん！」

千枝が声をかけるのと、

「やめて！やめて！、もういいから…」

杏子が露に抱きつくのと同時であった。

祖母をしっかりと抱えこんだ杏子の眼から、

涙が流れ落ちた。

呆然と眺めている千枝の前で、杏子は露を抱きしめた手をいつまでも離そうとしなかった。

次の朝も、その次の朝も、露は鏡に向かった。千枝はもう何もいわなかった。

岡山へ帰る時、杏子が、

「おばあちゃん、かわいそう。でも、お母さんもこれから大変。わたしも、ときどきくるから、が

んばろうね…」

と、沈痛な面持でいった時、急に千枝の胸の中に何かがどざりと落ちこんだような重さが宿った。

化粧をする露を、朝ごと、かたわらで眺めながら、水を吸いこんだ海綿のようなじつとりとした重苦しさが身体の中に広がってくるのに、千枝はじつと耐えていた。

「そう。おばあちゃん、そんなことになっとったの。」

儼然とした口調で、木本由利子は呟いた。

由利子は女学校時代からの、千枝の親友である。久しぶりに電話をかけてきた由利子に、どうし

ても相談したいことがある、と露の話を切り出

したのは、由利子が特別養護老人ホームの寮母をしていることを思い出したからであった。

毎日、老人たちに接している由利子にならば露の様子から何かがわかるのではないか。と思ったそれに、この日頃、胸にたまっている薄黒いわだかまりを、吐き出してしまえる相手が欲しかったことも事実であった。

休日を利用して、由利子は早速、きてくれた。

千枝が熱い茶をついだ湯呑を、てのひらで囲みながら、由利子は黙って話を聞いた。

「大変ねえ。千枝さんも…」

湯呑を置きながら、歎息と共に呟いた由利子

の声には、しみじみとした思いがこもっていた。

露はさつきから自分の部屋でまどろんでいるよ。うだった。

家の中は森閑としていた。

茶の間の炬燵に由利子と向かい合っているだけで、千枝は、固く張った肩のあたりの緊張感で次第にほぐれてくるのを覚えていた。

「あのねえ。うちのホームにいるおばあちゃんの。中にも、よく似た人いるのよ」

由利子が口を開いた。

「九十を過ぎたおばあちゃんんだけど、ご主人は早くに亡くなっているのね。主人が面会にこないって……。毎日じれて……。いらだって

……。寮母たちのいうことを全然聞かないの。」

「子供さんたちはどうしたの？」

「子供はないのよ。それでね。ホームでももう手こずってね。結局、ご主人は病気で別の病院へ入院してるということにして、よくい聞かせたの。そうしたらやっとおちついて…。」

そのかわり、あの人がいっしょくなくなってやってくるか知れないからって、毎日毎日、取り替え引き替え、着物をね。替えるの…。」

「哀しいお話ね。」

千枝の頭の中を、紅を塗った露の顔がふっと通り過ぎた。

「ほんとに…。とつても仲のよかったご夫婦だつ

たんですって…。そのおばあちゃんは、『主人がわたしを一人置いてどこかへ行くはずがない。二人は離れたことないんだから』って、ね。よくわたしたちにいうのよ。

死ぬ時も一緒だよって、固く固く約束したんだからといって…」

話しながら、由利子は何度も眼をしばたいた。「全くのぼけ老人というほどじゃなくてもね。話の内容がとんちんかんになったり、自分のいる場所を混同したりするようになるのは、やはり、それなりに何かのきっかけがあるみたいよ。

うちのホームのおばあちゃんは、一人暮らしになってから民生委員を通じてホームへはいった

由利子は少し間を置き、それから続けた。「わたし、こういう話を聞いたことがあるわ。人間ってね。年を取って現実への認識が少し薄れかけた状態になると、それまで理性でカバーしていた部分が、薄皮がはがれていくように消えていって、そのかわりに、それまで隠されていた潜在的な願望が、もろに現われてくるんですって…。

理性が薄れると、そのあとへ、裸のままのその人自身が現われてくるってわけね。

それで、そういう時の行動の原点っていうのは、その人の過去の人生の中にあるっていうわ。」

「そうなの……」

んだけど、それがぼけの一つのきっかけになったみたいね。

でも……。だからといって一人ではとてもおいておけないし、……。」

「むつかしい問題ね。ねえ。由利子さん、うちのおばあちゃんの今の状態にも何かきっかけがあるのかしら。

あなたもうちのおばあちゃんの元気な時、知ってるでしょ。あの、気性の勝ったおばあちゃんが……」

千枝は声をつまらせた。「そうねえ。わたしも医者じゃないからよくはわからないんだけど…。」

千枝は、人間というものの持つ不可思議さを思った。

一刻一刻、一日一日を積み重ねながら、人はみんな懸命に生きている。それが何十年を経過し、老いていくにつれて、好むと好まざるとにかかわらず、知らず知らずのうちに、不思議な照りかけりを見せるようになってしまふのだろうか。老いるとは、そういうことなのだろうか。

「ホームのおばあちゃんは、いつまでもご夫婦揃って長生きしなかった。いいえ、今も二人で長生きしてるつもりなのねえ。」

「そうねえ。それがあのおばあちゃんの潜在的願望だったんでしょうねえ。」

でも……。私ね。時々思うのよ。過去の生活の中  
に生き続けるってことは、哀しいけど、その人  
自身にとつては、ある意味では幸せな場合がある  
かも知れないな、って……。」

「過去の幸せな生活の中に生き続けられるのな  
らねえ。ホームのおばあちゃんの場合は、その  
一例かも知れないけど……。」

千枝は、自分の前で眼を閉じ、低い声で呟いて  
いた。露の言葉を改めて口の中で反芻してみた。

「キレイニナリタイ、キレイニナリタイ。」

露の場合を、由利子の話にあてはめてみても、  
容易にその焦点は絞れそうになかった。

露の心奥に、もし、潜在的願望とやらがあると

れぬ夜はもう白々と明けかかっていた。

昼間の由利子の話は、とりも直さず、人が生き  
ることの厳粛さと深遠さを語ったものにほかな  
らなかった。

人間誰もが過去を引きずって老いていくもの  
であることを思うと、自分自身のこれからの日々  
にも思いを馳せ、千枝は眠ることができなかった  
のである。

だが、ともあれ、今は、露の現実はどう対処  
するかが先決であった。

(以上1月20日放送分)

したら、いったいそれはどんな色あいをしている  
のだろうか。

捉えどころのない軟体動物のようなものが、露  
の中でぬらりくらりと揺れながら、自分を嘲笑  
しているように思えた。

日が西に傾いたのか、部屋の内が急にかげり、  
冷え冷えとした空気が漂い始めた。

それぞれの思いの中で、千枝も由利子も黙した  
ままであった。

家中が、ひっそりと息を殺しているような  
午後であった。

千枝が、ある一つの方法に辿りついたとき、眠